令和元年度第１回鳥取市政懇話会　議事概要

日　時：令和元年１１月２６日（火）午後２時３０分～４時３０分
会　場：鳥取市役所本庁舎３階　災害対策本部室
出席者：【鳥取市政懇話会委員（１３名）】
植田紀子委員、景下明美委員、岸本美鈴委員、国森洋委員、児嶋祥悟委員、下澤理如委員、綱本信治委員、西山信一委員、林由紀子委員、松下稔彦委員、山口朝子委員、山根貴世子委員、山脇彰子委員
【鳥取市】
深澤義彦市長、羽場恭一副市長、尾室教育長、河井総務部長、乾危機管理部長、高橋企画推進部長、綱田都市整備部長、中村経済観光部次長、横尾危機管理課長、塩谷政策企画課長、有本中心市街地整備課長

１　開会

2　市長あいさつ
〇深澤市長
このたびは、新たな任期での委員の皆さまの第１回目の市政懇話会となる。どうぞよろしくお願い申しげる。皆様には日頃より鳥取市政の推進に格別なるご理解、ご協力を賜り、改めて心より感謝申し上げる。
元号が令和になり新しい時代が幕を開けた。今年度は、本市においても鳥取市制施行１３０周年の大きな節目の年である。長年の懸案であった庁舎整備において、新しい庁舎を１１月５日に全面開庁させていただくことができた。ご理解ご協力に改めて感謝申し上げる。
市政の課題はたくさんあるが、市政懇話会であるので、色々な立場から色々な形でご意見、ご提言賜りたい。
この新庁舎の整備には大きな目標が三つあった。一つは、市民サービスを更に向上させていくこと。二つ目は、全国で災害が多発していることもあり、防災の最たる拠点として機能するような整備をしていかなければならないということ。三つ目は、市民交流の場として多くの市民の方に活用していただきたいということである。新庁舎には市民交流棟もあるので、色々な形で活用していただきたい。
限られた時間だが、よろしくお願い申し上げる。

３　委員自己紹介

４　会長、副会長の選任（事務局より提案すること及び提案内容に委員全員が承諾）
〇会　長　児嶋祥悟委員
〇副会長　林由紀子委員

５　会長あいさつ
〇児嶋会長
一言ごあいさつをさせていただく。この市政懇話会の委員は任期が２年、このまちの向上発展を図ること、市政の振興を図るということが我々のミッションということである。
今日のテーマには災害対策がある。私が聞きたいのは、鳥取市に水害が起こった場合、例えば5m、10m千代川がオーバーフローしたら、右岸・左岸がどうなって、皆さんの家がどうなって床上のどこまで浸水するか、具体的な話を聞かせていただかないと毎日心配である。そういうこともありマンションを買って11階に住んでいる。いつ鳥取市に水害がくるかもわからないので、皆さん注意をしなければならない。本日は、色々な災害の中でも特に水害に絞って話が聞きたいと思っている。
二つ目のテーマは中心市街地の活性化ということで、色々な方策があると思う。観光政策という観点もあるが、交流人口を増やしてもらって鳥取を活力あるまちにしたい。その他、イベントをたくさんするなど方策は無数にある。要は一人一つを皆さんが実行すればどんどん実現する。煮えたら食おうの鳥取はやめましょうということである。
今日は、たくさん皆さんから意見を聞いて、それを市政に反映させていきたいと考えているのでよろしくお願い申し上げる。

６　鳥取市政懇話会について
鳥取市政懇話会条例に沿って事務局より説明

７　議事
・市役所新本庁舎での災害対策について　　・・・資料１（事務局説明）

【意見交換】
〇綱本委員
段ボールベッドは備蓄できないと聞いたが本当か。
■乾危機管理部長
鳥取県が段ボール工業組合と協定を結んでおり、避難生活が長期にわたる大規模災害の場合、協定している業者からいち早く鳥取県内に供給できる仕組みになっている。多少は在庫があるが、日頃から在庫を持っておくというわけでなく、大規模な災害が起こればすぐに支援が受けられるよう仕組みを整えている。
〇綱本委員

段ボールベッドは、湿ってだめになるということはないか。長期間置くと湿って使い物にならなくなるというのを聞いたことがある。

■乾危機管理部長

浸水被害の時はみなさんが避難するのは、浸水の影響のないところ、あるいは浸水がおさまっている水が引いたところである。水によって使えなくなることを避けるような運用をしたい。

○山脇委員

質問２点。先日自分の住む地域で防災訓練があった。災害があった場合、各公民館・体育館と災害対策本部室との連絡ができる端末（iPad）は誰が持っているのか。もう一点、可動式のカメラは固定されているものだと思うが、鳥取市はドローンの活用はあるのか。

■乾危機管理部長

端末については、避難所ごとに避難所班の職員がいち早く駆けつけるので、その職員に災害対策本部室のシステムと連携できる端末を携行してもらう。その職員経由で情報が入る。河川を監視する物としては国交省や県の固定のライブカメラがあるが、固定カメラのない地点は市の可動式カメラを準備し、あらかじめ危険が予想される箇所に設置しインターネット経由で映像がくるようにしている。ドローンについては研究中である。技術の進歩が日進月歩で、強風や雨の中で飛ぶものも開発されている。非常に高価でもあるため、技術の開発を見定めてから見極めようと思っている。

○下澤委員

昨年７月に大雨が降って、鳥取市で初めて避難指示が発令され慌てた。中ノ郷地区の話。避難指示が出たのが夜７時前、小学校の２階に避難指示があった。最初に来たのが、校長先生。その後８時に市から水が 40 本届いた。住民 4000 人の１％分しか水が来ないのだなと思った。９時に２名の市職員が来て受付が始まった。避難指示の後、水の配達が１時間後、市職員は２時間後に到着であった。遅いなと思った。難しいとは思うが、できるだけ早い体制にしてほしい。

■乾危機管理部長

貴重な情報。昨年の７月豪雨では全市に大雨特別警報が気象庁から発表された。全市避難に指示が出て、警戒レベル４という状態になった。そういう状態になると、鳥取市内 60 か所を超える避難所を同時開設という事態になる。市職員が同時にそれだけの体制を組むのはなかなか難しいという状況になった。そのようなこともあり現在大規模災害に備え、避難所運営マニュアルを作定中である。発災直後に市職員がなかなか駆けつけられない時は、地元の住民の皆さんの方が早く避難所に行くことができる。鍵をだれが持っていって開けるのか、最初の時点でどのように避難所を開設するのかなど予めマニュアル化するなど素案を作って地域のみなさんにお出しし、各地区で訓練をして評価していただ

き、最終的なものを今年度末に完成させようということも進めている。避難所の開設を地元の方にもお手伝いいただけるような体制を作ることが災害時は大事だと考えている。備蓄品が人口の１％程度しか届かなかったのは、時系列ごとにプッシュ型で送り込んでいくので初動がなかなか難しかったところがある。時間経過と共にプッシュ型で追加していく体制で、災害時にはしっかりやっていきたいと思っている。

○下澤委員

その後の話で、中ノ郷小学校に避難者は０であった。９月の鳥取市防災訓練で、地域で避難所開設をするという訓練を中ノ郷地区で行った。市職員が来られる前に、自分たちで避難所運営する訓練をした。まだ鳥取市ではほとんどの所が訓練していない。訓練は１年に１か所２か所じゃなくて、５カ所ずつくらいやればいい。鳥取市 41 地区あるので、そういう訓練を早めにしておけばよいのではないかと思う。

■乾危機管理部長

避難者 0 についてであるが、実際に災害が起こった全国各地でも、避難になかなか結び向かないことが現実に起きている。正常性バイアスと言って自分だけは災害の被害に合わない・安全だという心理が災害時には起こりやすい。これを打破し、避難を決断さるために我々行政は情報の伝達に切迫度・緊急度も持たせて伝えることに全力をあげないといけない。また、普段から、災害時に避難しなくても自分は大丈夫だという心理に陥ることなく避難行動をしましょうという啓発も行わないといけない。大きな課題である。総合防災訓練については市内でなかなか実施できていない。大規模訓練は一度にたくさんはなかなか開催できない。訓練の様子はつぶさにホームページに出している。自主防災会の皆さんにはしっかり見ていただき、未実施の地区においては、こういうふうに避難所を開設するのだというノウハウが伝わるように努めていきたい。ホームページを参考にして、地区単位でしっかり訓練をしていただけるように努めていきたい。

○岸本委員

各事業所に防災管理者がいるが、講習会が以前は鳥取市でも開催され受けやすかった。３０代の若手を育成したいが講習会が境港市しかないので、鳥取市、倉吉市でも開催していただけるとありがたい。

■乾危機管理部長

意見は承る。鳥取市では事業所向けではないが、防災リーダー、防災主導員の育成に努めており今鳥取市で 700 人近く登録している。事業所でもそういった取組が大事であるし、地域でも防災リーダーになれる人を育て、「自助・共助」の共助の力を高めていきたいと取り組んでいる。

○綱本委員

最近洪水の場合は避難指示が出た場合、垂直避難が主流と聞いたことがあるがどうか。

■乾危機管理部長

水害は予め予想のつきやすい災害である。大雨注意報、警報、特別警報と段階を追ってくるし気象庁の発表も精度も高く何日か前から予測できる。基本は水平避難と言って浸水域の外に出る避難が原則である。しかし、災害が進行して外に出るのは既に危険、あるいは深夜未明の移動でかえって危険だという場合、自分の自宅の上階が浸水レベルよりも上で安全であるならば、上の階に逃げても立派な避難行動だと伝えている。2017 年版であるが全世帯に配っている総合防災マップで、自分の住む地域がどれだけの浸水の深さになるか色分けで示してある。浸水 3m以内なら自宅の 2 階以上に避難すれば少なくとも命は守れると判断できる。それが 4～5mで 2 階でも危ないという地域は、垂直避難より水平避難で早めに行動していただきたい。あるいは近隣の高い建物に避難してもらいたい。指定する避難所が浸水域の中にあっても、小学校校舎の 2 階以上が安全ということであれば避難所に指定する場合もある。垂直避難でも命を守る行動であれば大切だと啓発している。

○松下委員

鳥取地方気象台の情報がすぐに見られるようにしていると思うが、これは一般向けであって、天気予報やホームページなどでも見られる。今は、民間の気象予報会社が活躍しており、特定目的向け予報もある。災害でも正確に早く詳しい情報がつかめる。イベントや農業などの目的のための天気予報を早くキャッチすることができる。民間の気象予報会社の情報を活用されるという考えはあるか。

■乾危機管理部長

民間の気象予報会社はウェザーニュースと受け止めた。気象庁と鳥取地方気象台の情報は見ているが、ウェザーニュースについても有料であるが局所的な精度の高い情報は見ている。気象台との予報との違いがないか検証しながら避難情報の発出につなげているところである。災害時でない地域のイベントなどを考えられるのには局所的に見られるので便利であると思うが、市としては災害時に気象台と民間会社の情報が違っていないか確認をしながらやっている。

○国森委員

可搬型ライブカメラに興味がある。常設の国交省が設置しているものについてはよく見る。可搬型ライブカメラは台数がどれくらいでどういうタイミングで動かしていくのか。

■乾危機管理部長

例えば青谷でいうと勝部川、日置川は海沿いで合流している。潮位が高く水位が上がっている時は氾濫しやすいという予測が立つ。そういった時、県のカメラもあるが、十分でない所に持って行ってつけておく。職員の安全性を確保しながら河川の水位を監視するという運用を考えているところである。土砂災害についても、土砂災害警戒情報で危険なポ

イントを見て、人が住んでいる地域に近く、危険を示す数値が極めて高まっている時にはそこに設置して安全性を確保しながら土砂災害を監視するということも考えている。台数は１２台配備している。

○西山委員

応急対応より若干後の対応に対しての意見だが、鳥取中部地震の対応を経験したことがあり思い出した。例えば、ブルーシートを配布する業務を市がする場合に、どこでどう配付するのかシミュレーションが大事になる。倉吉市役所では、少し奥まった場所で配布したところ大渋滞になり非常に苦労していた。渋滞や混乱が無いような場所を想定しておいたほうがよい。また、ボランティアセンターが立ち上がると、おそらく社会福祉協議会がされると思うが、市が強力にバックアップしないとなかなかうまくまわらない。いわばボランティアセンターのボランティアが必要になる。ブルーシートをかける作業は素人にはとても難しく、そういった作業をする事業者の紹介は市が行うなど建築協力会のような組織がしっかりしていないとボランティアセンターもまわらない。既にされているとは思うが日頃から各方面と協定を厚く結ぶことが大事と感じる。

○綱本委員

袋川は歴史的に山側に堤防があって駅側に堤防が無い。袋川が増水すればほとんど駅側に流れるようになっている。歴史的経緯もあるので堤防を同じ高さにしないのか。

■乾危機管理部長

袋川は国の管理河川、大路川は県の管理河川だが、過去の災害の経験を生かして堤防の高さ・強度について、国・県は河川整備を進めてきている。今回、関東甲信越等の災害で学ばないといけないのは、堤防では守りきれない降雨量が多発しているのでそれに備える必要があるということである。

・庁舎移転に伴う中心市街地活性化について・・・資料２（事務局説明：綱田都市整備部長）

【意見交換】

○綱本委員

今は駅南側の方が駅らしい駅という感じ。なぜかというと駅の近くの道路が東西に貫通していないから。駅の近くになると車がゆっくりになって歩行者も安全に渡れる。駅の北側は道路が貫通しているので駅と商店街が分離されてしまっている。高齢者は地下道の階段を降りて登っていくのが大変。車での走行時間は回り道をしてもたいして変わらないので交通を遮断しても大丈夫ではないか。そうすれば歩行者は駅と商店街全体を回遊できる。イオン鳥取北店にみんなが行き出したのは、自転車も車も通らない安全な商店街だから。駅の近くは車がバンバン通って幼児にとっても危ない。安全な商店街を作ればみ

んなが来てくれる。歩行者天国の時はけっこうな人がくる。歩行者にとってはそういうニーズがあるがどうか。

○山口委員

中心市街地で保育園をしているが、朝夕、市役所移転してから町並みが寂しくなったという感じが否めない。ただ、コンパクトシティとして生活のニーズには充実した町である。昨今、高齢者の交通事故の問題で免許を返納することを促進しているので、今後高齢化になっていく中で、自動車から離れていくということになると生活しやすいのは中心市街地だと思う。中心市街地の話になると、いつもネガティブな話で、空き店舗のことや町がさびれてきたなどと言われる。中心市街地に住んでいる私たちはそうは思わないが、離れた人たちから見るとものすごく空洞化して何もない感じにとらえられていないか心配になる。もっといい町だというアピールをしていただいて、たくさんの方に住んでいただきたい。若年層だけでなくむしろ高齢になった方がマンションを買って、中心市街地に住んで、公共交通機関を利用して、アクティブに生きていきましょうというようなポジティブなキャンペーンをしていただきたいと思っている。

○児嶋会長

同感である。

○植田委員

マスコミの立場というわけではなく読者の方々から寄せられた声の中で、市役所が移転して大きなスペースが今駐車場だけ機能しているが、県庁も県民文化会館も市民会館も近いのにもったいないという声がある。先ほどもあったが、若桜街道はあまり車も通らないのであれば歩行者天国にして、市役所跡地を住宅地にすればよいという声も聞く。山口さんのご意見にもあったが、高齢者にとって住みよい街、ある意味住みよさをアピールするには、中心市街地の中でも大きな市役所跡地が住宅の拠点になってもいいのではないかという声も聞く。

○綱本委員

若桜街道は国道であるが、国道を返上すればもっと自由にできる。車が県庁方面に行くには、若桜街道とは別の街道を主要な道路とすればよいので、若桜街道については歩行者天国にすればよいと思う。

○児嶋会長

よい意見。

○景下委員

駅南地区のコンパクトシティの構想に前から期待している。資料で見ると動きやすく動線もよく、見事に近い位置に拠点が作れたなと思った。駅南庁舎は子育て拠点として5月

にリニューアルオープンとあるが、子育て拠点とは具体的にどのような形でできあがるのか。

■深澤市長

駅南庁舎には、これまで福祉、税など窓口関係を所掌する部署が入っていたが、このたびの移転で新本庁舎の 1 階と 2 階に移転した。その後に、中核市は設置が必須になっている保健所と、さざんか会館にある保健センターとを、業務が関連している部分もあるので、一体的に駅南庁舎の 1 階に配置をするところである。保健センターでは子育て関係の事務も所掌しているので、一体的に配置をすることで市民の皆様に便利でわかりやすくなったと感じていただけると思う。今改修を進めており予定では来年５月の連休明けあたりの開庁を目指している。またお知らせさせていただく。

○景下委員

さざんか会館から移転するということか。

■深澤市長

保健所は県の東部総合事務所にも一部の課がある。それを一体的にさざんか会館も含めて駅南庁舎に配置する。

○下澤委員

私自身あまり駅に行かないが行かないのはなぜかと考えた。魅力がないから。この前、イオンではブラックフライデーをやっていてものすごく車が並んでいた。駅ではイベントが少ないなどがあると思う。結局、人口が減っていき、高齢者が増え、その少ない人口を駅の方へ集めようかという感じがする。その中で、「賑わいの創出」という素晴らしい言葉があるが「賑わい」とは何か。人がたくさんうろうろしていればいいのかということでもないと思うが、資料を見ると、駅南庁舎など用事がある人だけが駅周辺に行くようになっている。本当の賑わいって何だろう、用事が無い人がうろうろしている方が賑わいじゃないかという感じがする。用事が無い人たちにどうやって来てもらうかということも考えた方がよい。賑わいとは何か。みなさんはどう思われるか。

○林副会長

都市整備部長の説明にあった第３期中心市街地活性化基本計画の重点課題である「恒常的な賑わいの創出」や「多世代の交流」が賑わいを生み出すものとなる。魅力のある店が集積し、そこに人がたくさん来る、楽しめる場所、美味しい食べ物がある等色々な要素がある中で賑わいは作られていくと思う。観光コンベンション協会も日交センタービルの 2 階に事務所があるが、1 階にふるさとの物産を置いている。鳥取の品物を置いていて賑わい作りの一役を担わせていただいている。商店街は努力しているが人口減の影響もありなかなか厳しい状況である。そういう意味でも第３期中心市街地活性化計画に大いに期待したい。

○岸本委員

賑わいの話が出ているが、人が来ることは「人」だと思う。人が人に会いに来ること。昔用瀬町では流しびなくらいしか人が集まることがなかった。今は若者がふるさと散歩市のようなことをして全国からお店や人がたくさんきて賑わった。その一週間前には商工会まつりなど何千人もきて賑わった。この辺り、駅の近くでも用瀬の人が中心になってハロウィンをやって先月大にぎわいであった。年間に何回も人を呼ぼうとなると、ただのイベント目的ではなくて、「あなたのコーヒーが飲みたいからあなたに会いにきた」という人が訪れる。海外からもそう。「ゆいの宿」というのをやっているが、香港の新聞で取り上げられて、海外からも人がきた。どうやったら楽しんで帰ってもらえるか、一人ひとりが鳥取の魅力を伝えられる人になり、日本文化を伝えられる人になること。儲け関係なくやっていればお金は後からついてくると思う。ここも楽しい町になってほしい、用瀬も楽しい町になってほしい。若者とかつての若者が一緒に手を組んで一緒に楽しむこと、まず自分たちが楽しむことじゃないかと思う。

○児嶋会長

すばらしい意見。私から市への質問で、最近新聞やテレビに出ている鳥取県が上限 4000 万円で鳥取大丸の屋上や５階に何かをするというのが出ているが、そこ以外に県はどこを支援するのか。どういう提案が出てくるというイメージなのか。大丸だけで終わりということはないか。

■綱田都市整備部長

４０００万円について直接はわからない。鳥取市は大丸の方向から駅の間に横断歩道の設置を考えている。市だけではなく道路管理者の鳥取県と交通管理者の鳥取県警、商工会議所が一緒になって調査をして、実現するにはどういった取組を行うのかということを事務レベルで進めている。周辺の交通量調査もしている。駅前の車の流れについての意見は将来的な課題になろうかと思う。どういう形であれば、中心市街地の中で人が滞留し、車もスムーズに移動できるかというようなところを研究していきたい。また、紹介であるが、市では金融機関で融資の取組もしており、空き店舗で新しい取組をされる方に融資を行う制度も設けている。サンロードの中にアカリブリューイングといったビアホールのお店も新たに出てきた。こういったことを地道に続けながらやる気のある民間の方を応援し、賑わいの創出に取り組んでいく。

○児嶋会長

最近よく新聞テレビに出るのが ICT、IoT のこと。携帯電話でキャッシュレス決済をして自転車をどこでも借りて乗り捨てできるようにする取組について鳥取市はどう考えているか。

■綱田都市整備部長

具体的な取組は考えていない。事業者から問い合わせがあったことは聞いている。これか

らの時代は徒歩や自転者での回遊は大事。手法は別にしてもそういった取組を研究していきたい。

○下澤委員

鳥取砂丘周辺では砂の美術館に年間５０万人、砂丘に年間１３０万人くらいの観光客が訪れるが中心市街地にまで入ってこない。せっかく近くまで来ているのに入ってきてもらっていない。どう取り込んでいくのか。

○児嶋会長

大変難しい問題。

■深澤市長

そういう取組は非常に大切である。砂丘や砂の美術館だけでなく中心市街地もいくつかの観光拠点ある。わらべ館が今１２、３万人くらいで安定的に入館者数推移している。これだけでなく、観光、周遊の核になる施設が必要だと考えている、今整備を進めている鳥取城跡であるが、昨年１０月に擬宝珠橋が完成した。お堀に架かっている復元された木橋は、３６ｍあり全国で一番長い。往時の姿もよみがえり、いよいよ来年には中の御門も少し具体的に姿が現れてくると思うので、城跡も非常に魅力的な観光資源の一つだと考えている。こういったものを最大限生かしながら中心市街地にもたくさんの方に来ていただけるような取組をこれから今まさに進めていこうとしているところである。砂の美術館、鳥取砂丘、中心市街地のさまざまな魅力的な観光スポットに皆様にきていただけるような取組をこれから具体的に進めていきたいと思っている。

○林副会長

観光コンベンション協会の取組を話す。駅に観光案内所を３６５日開設している。初めて来た方に、鳥取砂丘への行き方など、様々なお知らせをしている。１００円バスについて、わらべ館、仁風閣、やまびこ館の案内もしている。土日祝日はループ麒麟獅子バスが鳥取砂丘まで走っているので紹介している。外国人も結構いらっしゃっている。街中に人が歩いてないといわれるが、実際には歩いていらっしゃる。駅の辺りは、外国語もよく聞こえてきて外国人も増えていると感じる。ちゃんと観光客は来ていらっしゃるが、もっと来ていただくような努力をしていきたいと思う。

○国森委員

わらべ館も大阪のエージェントのところに営業に行くが、冬場はかにツアーが大阪のエージェントに好まれる。砂丘に行って賀露に行ってかにを食べて、わらべ館に寄っていただくコースが非常に多い。年配の方も多く、1階の木造教室の部屋で、童謡唱歌を足踏みオルガンで一緒に歌っていただく唱歌教室が好評である。高齢者向けで歌を歌っていただくようなものは健康にもいいし好評なので、更に紹介して、リピーターや新しいお客さんをつかんでいきたい。わらべ館もけっこう来てもらっている。

○西山委員

第３期中心市街地活性化計画は環境大学の教員が委員長として取りまとめた。着実に進めていく段階だと思うが、ハードからソフトに移行する仕組みを考えることではないか。賀露のわったいなを作るとき、市長からアドバイスを受けて今の場所に整備をし、県と市とで共同で駐車場を整備したが大変苦労した。ハードよりソフトだなと未だに思っている。人がいろいろと考えて、モノからコト、色々な行事をやって定番化して定着化して、安定をしてきたと理解をしている。駅の周辺については先ほども意見が出ていたが、人の動きを作るのに交通をコントロールするのはとてもいいアイデアという気がする。お金もかからない。あとは非常に難しいと思うが、周辺には観光客が訪れているが中心市街地の付近に立ち寄ってもらえないことについて、観光商業に知恵をもっと出さないといけないところではないかと思う。市でも SQ プロジェクトチームが立ちあがっているようなので、若い人のアイデアを生かしていくといいソフトが出てくるのではと期待している。

○景下委員

市報からダイジェスト版を多言語で発行しているがイベント情報の中でわらべ館がダントツに多い。新しい市役所にはイベント情報の電光掲示板があるのか。ふれあい会館には、今日、今月の催しものが一覧で出るようなシステムがある。そういうもので PR をしていくべきだと思う。まちパル鳥取の施設もすばらしく 3 階に英語村がある。20 人はきている。やまびこ館とわらべ館は少し離れているが、パレットとっとりを含め、そこにまとまった施設があるので、そこを上手に PR していけばよい。観光で言えば、鳥取駅の中の観光案内所から歩いて 1 分くらいのところに多言語で対応できるスタッフがいる。本当に駅周辺が充実していて、こういう施設があって歩いていけるのだということを観光客のみならず市民がもっと PR してくれれば大変うれしいなと思う。

○綱本委員

鳥取の人口はじわじわ減少しているが世帯数はじわじわ増加している。この影響は何かと考えたことはないか。世帯数が増えるということはマンションや戸建ての需要があるということ。なぜ世帯数が増えるかというと結婚したら親と同居しないから。その結果、中心市街地は高齢者が多いが、あと 30 年すれば中心市街地は若い街に生まれ変わるのではと思う。

○児嶋会長

時間がきたのでこれで終わりたいと思うが、最後に一言。未来の年表を読んでみると 2020 年に女性の半数が 50 歳を超える、2033 年に銀行、百貨店、老人ホームが消滅する、2039 年に火葬場が不足する、2040 年に自治体の半数が消滅するとある。みなさんこんなことにならないように頑張ろう。今日はありがとうございました。

８　閉会